

ていく必要があるとのことでした。

基調講演・提言の後は、発表をされた4人の方たちとコーディネーターの方とのシンポジウムが行われました。その中で、全ての方が共通して話されていたこととして、【働く】ことについて、特別支援学校を卒業する18歳で一つの決断をしなければいけないというのは、早すぎるのではないかということがありました。例えば、学校を卒業した後に2~3年くらい通う専攻科を設け、そこでさまざまな経験を積み重ねることによって、一般就労・就労移行支援事業・就労継続支援A型、B型事業所・生活介護事業など、本人にとってより良い選択へと繋がっていくのではないかといった意見が挙がっていました。

【働く】と言う言葉には、【傍を楽にする】、つまり自分のまわりの人を楽にするという意味があります。私は、一般就労をされている方はもちろんですが、障がいの重い方にもその人にとっての【働く】があると思っています。利用者の方たちと一緒に仕事をさせていただくことを通して、一人ひとりにとっての【働く】とは何かを一緒に考えていきたいと、分科会へ参加させていただいて感じています。

第3分科会【暮らす】に参加して

大阪市育成会地域生活支援センター
主任 田口 健一

育成会全国大会では、第3分科会(「暮らす」がテーマ)に参加させて頂きました。

コーディネーターには、パサージュいなぎ施設長の山本あおひさん、基調講演では、北信圏域障害者生活支援センター所長の福岡寿さん、提言者としては、福岡市手をつなぐ育成会保護者会幹事の古川直美さん、育成会かすが副会長の辻誓子さん、社会福祉法人げんき相談サポートえいぶる相談支援専門員の鶴戸三佳子さんのメンバーでした。

初めに、福岡さんの基調講演がありました。福岡さんは相談支援の立場からお話しされました。支援のあり方として、分かりやすいたとえ話でお話しされました。車が脱輪している所を見て見ぬふりをするのではなく、そこに通りかかる車を止め、皆を巻き込んで役割をきめて、助けなければならないと言われていました。知らないふり、任せるから、巻き込み、関わる支援に変わらなければならないと言われていました。本人を中心に、本人の声をすべて聞いて支援を組んでいくべきであると言われていました。今までのサービス主導主義からニーズ主導主義に変わっていかなく

ばならないと強く話しておられました。モニタリングを行い、支援計画をたてる、その結果どのサービスを使うのか、また、あったサービスが無ければ、自ら創り出していく作業を必要であるとの事でした。ただ、支援を組んでもそこがゴールではなく、モニタリングを繰り返し行い、本人のニーズを聞き取り、またあらたに支援計画をたてていくと言う繰り返しであるとおっしゃっておられました。

古川さん、辻さんからは障がいをもつ子供の母親としての提言がありました。古川さんは現在グループホームの世話人をされていることで、保護者と支援者の立場に立ってお話しされました。初めは保護者として、グループホームの生活が快適になるように、居心地の良さだけを考えて支援していたが、実際支援員の立場になると、生活の事で出来ることを増やしていきたいと考えるようになり、食器洗い、洗濯など出来ることを増やしていきたいと考えられるようになったとの事でした。そのためには、グループホームだけの支援ではなく、地域の方々、行政、医療など様々な支援が本人を中心に輪となっていければとおっしゃっておられました。

辻さんからは、これからの育成会活動について話がありました。保護者、本人の高齢化が進み、若い世代へのバトンタッチがうまくいっていないのが現状であるとの事です。「親なき後」の本人への不安が募るなか、育成会が掲げる「共生社会」づくりにどのように関わっていくことが出来るのかが今後の育成会活動の課題ではないのかと話されていました。

鶴戸さんからは、相談支援ワーカーとしての立場からお話しがありました。平成24年4月から、サービスを利用される方に、「サービス等利用計画」を作成することになり、作成を通して、①本人(家族)が希望する生活をじっくり聞くことが出来る。②本人の課題が整理でき、サービス利用の目的がはっきりする。③サービス提供責任者も個々でもなく相談支援専門員がコーディネートすることで、チームとなってより質の高いサービスが提供できる。④計画、モニタリングとずっとつながって行く事で、初心に返り新鮮な気持ちで向き合うことが出来る。と言われ、鶴戸さんは、本人や、家族、周りの方々が笑顔で生活できるように計画をたてておられるとの事でした。

私は、現在宿泊型自立訓練の事業所に勤務しており、分科会のテーマ「暮らす」という課題に日々取り組んでおりますが、今回全国大会に参加させて頂き、提言者の方々のいろいろなお話を聞き、あらためて「暮ら